

場所と物語のあいだ：「石巻アーカイブ」の地域活動における写真の 〈ここ〉性

Between Place and Story: the “Here-ness” of photo in the Ishinomaki Archive’s local activity

高原耕平¹, ゲルスタ・ユリア², 定池祐季², 奥堀亜紀子³, 小野寺豊⁴

Kohei Takahara¹, Julia Gerster², Yuki Sadaike², Akiko Okubori³ and Yutaka Onodera⁴

¹ 人と防災未来センター

Disaster Reduction and Human Renovation Institution

² 東北大学 災害科学国際研究所

Tohoku University, International Research Institute of Disaster Science

³ 神戸大学大学院博士後期課程修了

Ph.D., Kobe University

⁴ 特定非営利活動法人 石巻アーカイブ

Non Profit Organization Ishinomaki Archive

Most of the local archival activities developed in the disaster-affected areas after the Great East Japan Earthquake focus on preserving records of the damage and raising awareness of disaster prevention. Such archives are considered to be an important resource for disaster risk reduction. In contrast to solely focusing on the Great East Japan Earthquake, the NPO “Ishinomaki Archive,” which is the focus of this study, concentrates on the history and collective memory of Ishinomaki City from the Meiji period onwards. This research considers the activities of the Ishinomaki Archive, which focuses on the pre-disaster period and therefore is not considered a disaster archive, to become a vital source for the regeneration of the region after the disaster. This study further interprets the significance of the organization’s emphasis on old photographs and maps in offering a connection between space, place, and memory.

Keywords: *Revitalization, Memory, Space and Place, Great East Japan Earthquake, Earthquake Remains, Photography*

1. はじめに：写真からよみがえるもの

2020年11月28日、著者（定池・奥堀）は宮城県石巻市で「おらほの町の郷土史づくりプロジェクト」の会合に参加した。このプロジェクトは石巻市を7地区に分けて各地区の郷土史を写真・地図・年表を交えた『事典』としてまとめるもので、すでに4地区分の冊子を公開している。この日の会合は残りの3地区のうちの1つ、中央・住吉地区の古写真を共有するものだった。スクリーンに古い写真が投影されるたび、高齢の参加者たちが撮影地点や関連する知識や記憶を思い思いに語り始める。北海道と岐阜出身の著者には見知らぬまちだけれど、写真と地図を見比べていると少しずつ双方がつながり、かつてのまちのすがたが立体的に感じられてくる。この場所で生きてきたひとびとの思い出語りを聞いているうちに、写真のなかのひとびとが動きはじめるように感じる。なにかがよみがえっている（写真1）。

このプロジェクトを進めているのは石巻市の郷土史愛好家たちが2016年に立ち上げた特定非営利活動法人「石

巻アーカイブ」である。中村（2018）は「デジタル技術を活用して、広く地域住民に向けて地域の歴史や記録を残し、伝えようとする」住民活動が1990年代後半から国内各地で生じていることを指摘し、こうした動きを「市民デジタルアーカイブ活動」と総称している¹⁾。上述の会合を経て編纂したコンテンツをウェブサイト上で公開する「石巻アーカイブ」は市民デジタルアーカイブ活動の一つであると言える。

東日本大震災により被災地各地でデジタルアーカイブが生まれた¹⁾。今村ほか（2014）の調査によれば、発災3年後時点で39団体が震災デジタルアーカイブを立ち上げている²⁾。また、国立国会図書館東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」には67のデジタルアーカイブが登録され、その大半がメタデータを「ひなぎく」に提供している²⁾。それぞれのアーカイブの目的・理念は多様だが、発災当時の状況や復旧復興の過程を記録・保存し、「後世へ伝え残す」ことを主眼とすることは共通しており、また運営母体の大半は自治体や大学など公的な組織もしくは報道機関や大手IT企業等である。災害体験ないし教訓を伝承する



写真1 住民参加ワークショップの様子（提供：石巻アーカイブ）

ことの重要性が再確認されている現在、書籍や教科書等による災害伝承の取り組みを震災デジタルアーカイブが豊富な事例・証言記録・写真等で「補う」ことが期待される³⁾。

このように、被災地や社会において、伝承・復興・防災等の諸活動の土台となる記録・情報を提供し、それらを補完することはデジタルアーカイブの重要な役割である。しかし、アーカイブの役割はそれだけなのだろうか。本稿冒頭に示した情景からは、「石巻アーカイブ」の活動が伝承・復興・防災の「補完」以上のことを実践しているように思われる。一般的な震災デジタルアーカイブは書誌情報やデータの静的・受動的な提示を基本としている。アーカイブが持つ記録・情報をどのように活用するかは市民や専門家に委ねられている。一方、市民デジタルアーカイブである「石巻アーカイブ」の取り組みは、石巻市の住民自身が主体となり、震災に限定されない地域の歴史と記憶を汲み取ろうとするものである。つまりアーカイブの活動そのものが、能動的・直接的に地域の伝承・復興・防災に寄与していると考えられる。

公的機関や大企業が運営する震災デジタルアーカイブは、大量の記録・情報を安定して社会に提供できる。ただ、そうしたアーカイブは情報の提示の形態が似通う傾向があり、それに伴ってアーカイブの理念や目的も定型化してゆくおそれがあると考えられる。これに対して、市民デジタルアーカイブの多くは運営主体が不安定だが、地域住民とより近い立場で柔軟に活動を模索・実施することができる。災厄の生々しい印象が「八重葎に埋もれる」（寺田寅彦）のを防ぐためには、公的・大規模な震災デジタルアーカイブと市民デジタルアーカイブそれぞれの強みを活かし合うことが重要であると考えられる。そのためには両者の実態を分析し、多様なアーカイブが被災地において果たしうる本質的な役割を再検討する必要がある。

2. 先行研究、研究の目的、基本的概念と方法

このような背景を踏まえて、本稿は「石巻アーカイブ」を具体的対象として、市民デジタルアーカイブ活動が被災地において果たしうる役割を検討する。本章では市民デジタルアーカイブ活動に関する先行研究を整理したうえで、調査方法と研究目的を記述する。

(1) 先行研究：市民デジタルアーカイブ活動の役割

中村（2018）は、国内の多様な「市民デジタルアーカイブ

ブ活動」を以下の4要件によって緩く定義することを提唱する。①主に特定の地域の情報を対象とする。②デジタル化されたコンテンツの収集・保存・発信を行う。③インターネットなどを介してコンテンツないし関連活動の情報発信を行う。④市民が何らかの形でアーカイブに主体的に関与している¹⁾。

本章で詳述するように「石巻アーカイブ」の活動形態はこの4要件に該当する。被災地から生まれた市民デジタルアーカイブであると言える。

では、被災地で生まれ、根付いている市民デジタルアーカイブないしコミュニティアーカイブ活動はいかなる役割を担っているのだろうか。この課題に関する先行研究は少ない。

国内外の震災デジタルアーカイブを調査・分類した柴山（2020）によれば、「市民団体等が実施している草の根アーカイブも数多く存在し、全体像が把握できない状況」である²⁾。

11件の市民デジタルアーカイブ活動の特徴を分析した中村（2018）は、各団体の典型的な活動動機として「地域の記録喪失への危機感」と「地域活性化の手段」が見いだされると指摘する。また、多くの団体が、イベント等の参加者や提供者から写真にまつわる思い出や会話を「丁寧に拾い上げ、記録する」といった作業を公的機関よりも「きめ細かに行える」と認識していることを明らかにしている。ただし11の調査対象のうち災害に関連する活動を実施しているのは2団体（NPO「20世紀アーカイブ仙台」と、せんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないためにセンター」）である¹⁾。

北村ほか（2018）は、東日本大震災で被害を受けた仙台市荒浜地区で活動する2つのコミュニティアーカイブ活動⁴⁾「3.11オモイデツアー」「海辺の図書館」を報告している。「3.11オモイデツアー」は、災害危険区域に指定された荒浜地区の元住民と外部からのツアー参加者が海岸清掃や餅つき等のイベントに共に参加しつつ、かつての荒浜地区の話を聞くなどする「住民参加型の被災地ツアー」である。この参加継続により、元住民とツアー参加者が共に「コミュニティアーカイブの構築・運営に参加し、当事者意識を持つ」ことが指摘されている。震災以前の写真や地図が、地域の伝統や歴史について住民や外部参加者が語り合う「場」で映写される⁴⁾。

内山（2021）と小保田（2020）は、小谷村・白馬村・信州大学が共同開発した「神城断層地震デジタルアーカイブ」の事例を紹介している。東日本大震災後、なぜ残すのか・いかに活用するのかという目的が不明瞭なままデジタルアーカイブが乱立し、予算不足と共に一部は閉鎖したという先行課題を踏まえ、神城断層地震デジタルアーカイブは当初から防災教育等の活用方法と、将来的な住民主体の運営を見据えて開発された。官・学が立ち上げたデジタルアーカイブが民間への運営移行を目指すという珍しい事例である⁵⁾。

以上から、市民デジタルアーカイブ活動は、公的機関よりも市民・住民に近い立場での活動を通じて、「シビックプライド」の醸成⁴⁾や地域の主体性を獲得¹⁾してゆくものであることが示唆される。他方で先行研究は個別事例の報告が多く、被災地に根付いた市民デジタルアーカイブ活動がその場所の伝承・復興・防災に果たす役割の本質について論究する研究は不足している。すなわち、主体性の獲得といった現象と具体的な活動形態の連関を記述する研究が不足している。アーカイブが被災地において果たす役割を検討し、より良い在り方を探るためには、こうした

本質的な連関を明らかにすることが必要である。そこで本稿は、東日本大震災を契機に発足し、震災以前の共同体の記憶を重視する「石巻アーカイブ」を研究対象として、その活動の意味を分析する。

(2) 調査方法と研究目的

著者の1人(奥堀)は2017年から「住む」という方法を用いながら石巻でフィールドワークを続けている⁷⁾。「住む」ことは文化人類学の基本的なフィールドワーク手法であり、長期間の滞在・生活を通じて地域住民との関係性を深め、地域文化をより深く理解することが期待される⁸⁾⁹⁾。他の3人(高原・定池・ゲルスタ)と共に2020年から被災地の空間再編と記憶の関係をテーマとして石巻市門脇地区等で研究調査活動を始めた¹⁰⁾。現地調査や資料収集・調査等は強い役割分担を設けず、基本的に共同で実施した。専門分野はそれぞれ哲学(奥堀)、臨床哲学(高原)、社会学(定池)、人類学(ゲルスタ)である。現地調査や人的交流を通じた研究者自身の認識の変化・深化・共有そして記述を重視することは当初より4人共通の姿勢だった。調査条件を厳密に設定統制して網羅的にデータを収集分析することは避け、石巻市での調査等を通じた著者各自の気づきや解釈を研究チーム内で共有・検討することを重視した。

本稿では「石巻アーカイブ」代表の小野寺豊氏を5人目の共著者としている。多くの分野では「インタビュー」を共著者に加えることはなく、公刊論文上では匿名化される。しかし本稿では以下の3つの理由からこの慣習を避けた。第1に、小野寺は公費の助成を受けることもある特定非営利活動法人の代表者であり、氏名を強いて匿名化する必要性は薄い。第2に、小野寺は単なるインタビューや情報提供者としてではなく、他4人と共に研究過程での気づきや解釈を共有しあう相手として有った。本稿の執筆過程においても意見交換を反復し、5名共同で学会発表を行っている¹¹⁾。第3に、主体性の問題がある。学術研究者のみが書き手・語り手であり、「被災者」は研究者によって聞かれ・書かれる存在であるという構図を災害・防災・復興研究で維持することは、ときに正しく、ときに不正となる。つまり、かれを「インタビュー」として聞かれ・書かれる存在に閉じ込めることは発話の権利を剥奪することになり、匿名化による保護および尊厳と権利¹²⁾を奪うことは不正であり、共著者となることで他の4人が責任の分担を期待することは不正である。

こうした企図から、本研究は参与型公共民族誌 *engaged public ethnography* というアプローチで行われている。Fulco et al. (2019: 99) によると「参与型公共民族誌には、コミュニティベースの参与型アプローチが含まれる。このアプローチは、(民族誌) テキストの制作、発信、使用におけるコラボレーションを強調するものである」¹³⁾。

本研究は参与を強調するため、観測者と観測対象の分離を前提とした「科学的」研究ではない。本研究の主眼は共著者間の相互変容の記述にある。「被災地」における研究活動では、一度きりのデータ採集による場合を除いて、観測者と観測対象の徹底的な分離は不可能である。

研究調査は「石巻アーカイブ」ワークショップの参与観察、小野寺による口頭での説明と質疑、そして石巻市門脇・南浜地区の現地調査、文献調査という方法で実施した。小野寺による説明と質疑は約2時間に及び、内容の録音・文字起こしを行い、そのトランスクリプトを再度共著者間で検討し、そのデータを次章に用いた。また、参与観察・現地調査・文献調査の内容は主に4章の考察に反映されて

いる。

本研究の目的は、被災地における市民デジタルアーカイブ活動の本質的な役割を、「石巻アーカイブ」を対象として明らかにすることにある。以下の論述では、まず同団体の活動形態を整理したうえで、同団体がとくに震災以前の史資料(古写真・古地図)を重視していることの意味を検討する。次いで、「記憶」および「空間再編」概念に関連付けたうえで、こうした活動形態が古写真・古地図を介して記憶と場所の関係を「ケア」するものであることを論じる。

3. 分析: 「石巻アーカイブ」と民間史資料

(1) 活動概要と特徴

まず、「石巻アーカイブ」の現在までの活動内容とその特徴を整理しておく。同団体は2016年、石巻市の郷土史愛好家・研究者ら10名により立ち上げられた特定非営利活動法人である(投稿時の会員数は個人・法人合わせて41名)。その出発点は、東日本大震災により地元の郷土史愛好家達が私蔵していた近世・近現代期の郷土史資料・民俗資料の多くが失われたこと、そうした私蔵史資料の公的な受け皿が震災後に無かったことだった。「歴史資料の被害を最小限に防ぐ」ため、被害を免れた史料をデジタル化して保管し、その一部を整理・公開すること、それにより「次世代への歴史の伝承によって、これからのまちづくりに活かしていく」ことを課題としている¹⁴⁾。震災発祥のデジタルアーカイブ活動でありながら、震災以前の郷土史資料を重点的に扱っていること、そのなかでも古写真・古地図を重視していることが特徴である。

「石巻アーカイブ」はこれまでに市域の古地図をカラー版でまとめた『石巻古地図散歩』『石巻古地図散歩2』、占領軍の一員として石巻市に駐留した米軍医G. バトラー氏撮影のカラー写真をまとめた『よみがえる1951』、そして前述の「おらほの町〜」プロジェクトによる『湊事典』『渡波事典』『門脇事典』『蛇田事典』などを出版している。この『〜事典』は、地名の由来、古写真・古地図といった資料を収集・整理するだけでなく、各地区での住民を交えたワークショップを経て編纂されている。また『よみがえる1951』の出版に先立って2018年に市内で開催された写真展「MIYAGI 1951」には2000人を超える来場者があった。

「石巻アーカイブ」のアーカイブ活動はデジタル・データを基軸としているが、史資料の収集・保存と公開の形態を分離していることに特徴がある。同団体が保管するのは基本的に史資料のデジタル・データであり、写真に関しては撮影者・撮影地点・撮影年代等のメタ・データを付与してデータベース化を進めている。物理的には3箇所ですべてデータのバックアップを保管している。他方でデータの公開は上述のような冊子を媒体としている。冊子の編集・印刷については石巻市の補助金を活用し、ロウ・データは一般公開せず冊子の頒布・PDFデータのウェブ公開にとどめている。大量のデジタル・データを全面公開する場合、サーバーの維持のみにも巨額の財源が必要である。「石巻アーカイブ」ではロウ・データの常時公開を避けることで、財政上の持続可能性を担保している。また、冊子は地域住民や図書館等に配布し、私蔵史資料や住民とのワークショップの成果が地域に直接還元されている。アーカイブ活動に参加・協力し、その成果が目に見えるかたちで地域に

戻ってくる。このような地域住民との互酬関係を維持することで、民間の史資料保存運動を担う「在野のアーキビスト」¹⁴⁾やコミュニティアーカイブとしての持続可能性を担保していると考えられる。

私蔵史資料の収集が順調に進んでいるのは、同団体代表者が団体発足前から自身の事業のつながりによって地域住民と信頼関係を培っていたことが大きい。中村（2018）は市民デジタルアーカイブ活動のコンテンツ収集が町内会や地元企業等の人脈・信用によって円滑に進むことを指摘しており、「石巻アーカイブ」の活動もそうした活動モデルに沿っていると言える。

また、石巻市では震災直後から被災史料や文化財の保全・修復が実施されているが¹⁵⁾、「石巻アーカイブ」が重視する近現代史資料・民俗資料はいわゆる文化財行政や「震災遺構・遺物」「震災伝承」の範疇から外れやすいものが多いと考えられる。民間団体の自由度・機動性によって共同体の記憶と歴史が支えられている例でもあるだろう。

(2) アーカイブと震災以前・以後

「石巻アーカイブ」が取り扱う資料の範囲は、空間的には現在の石巻市周辺、時間的にはおおむね明治から震災前後までである。古地図を広げて現在の空間との対応関係を調べ、古写真の中に親族や古老の子供時代のすがたを見出す作業は、まちの歴史と記憶の不確かな境界をまさぐる営みである。その営みで浮かび上がってくるものは、占領軍の兵士が当時貴重だったカラーフィルムに収めた子どもたちのほかにんだ表情や、まちに初めて降り立った飛行機、年に数度ひらかれる競馬場の喧騒といった、古き良き平和なまちの色合いである。そこには、まちのより鮮烈な記憶である東日本大震災は現れていない。暖かな好奇心を呼び覚ますノスタルジーを前景に出し、その背後に外傷的な記憶を押しやろうとしているとも解釈しうる。「石巻アーカイブ」の活動は震災以前と震災およびそれ以後を切り離そうとしているのだろうか。

本節では「石巻アーカイブ」の役割の本質について同団体代表である小野寺の表現を引用しつつ明らかにしてゆきたい。

同団体の活動趣旨は、前節で引いたように災害で消失しうる郷土史資料の保存・伝承である。保存・伝承に取り組む理由として、小野寺は地名と災害の関連付けを挙げる。

古いものをまとめて資料化して、皆さんにお伝えしようというところの一つに、防災という観点があります。その観点は地名です。例えば私の住んでいるのは石巻市水押という地名です。もう大雨が来ると必ず水が押し寄せてくるという地名なんです。〔東日本大震災では〕海側から来た津波がどんどん内陸から入って家の玄関まで来たという経緯です。そうすると水押という単なる地名が、深い意味を持っているはずだったんです。

南浜町って、国立復興記念公園になるんですけども、前の地名というのは南谷地（みなみやち）なんですよ。谷地というのは低湿地帯のことを言いますので、この南谷地という地名であれば、ここが低いとか、水が来たたら弱いというのはよくわかるんですけど、新しい町にはかっこいい名前がつくんです。今、石巻でも「あけぼの」「あゆみ野」「さくらの」そんな名前がつくんですが、もともとがどういう場所だったかっていうのが地名に残らないことになるんです。

石巻市は歴史的に行政区域の統合・変更を繰り返してきた。明治 22 年の市町村制施行前は現在の東松島市と女川町も含めた、桃生郡と牡鹿郡から成る 128 の村だった。現在の石巻市の形となったのは、最後に 6 つの町（河北町、雄勝町、河南町、桃生町、北上町、牡鹿町）が石巻市へ吸収された後である。平成 17 年 4 月と最近の出来事であり、それぞれの町のそれぞれの記憶を引きずったまま、現在の「石巻市」となった¹⁶⁾。こうした統合と市域開発の過程で、過去に自然現象や文化の残響を帯びた地名は少しずつ消えていた。

行政のやりやすい仕組みがどんどん先行してしまって、元々の歴史とか伝統とかっていうものがないがしろにされてしまっていると。まあそれが良い・悪いはまた別判断になるんですが、そういうところが私にとって一番悔しかったことですね。悔しいというのは、結果としてこうして犠牲者がいっぱい出たということが、非常に悔しかったです。

小野寺はここで震災という出来事（多くの犠牲者が出たこと、その悔しさ）から震災以前の石巻市の近代化の意味を遡って解釈しなおしている。いいかえれば、震災とそれ以前をつなぎなおし、震災以後のまちづくりや市民生活に過去の災害文化を持ち込みなおすことが企図されている。古地図はその企図のための強力な媒体である。

小野寺がつながりを取り戻そうとしている過去の郷土のすがたは、客観的な歴史的事実というよりも、ある種の実感を伴ったものである。

これを今の人たちに伝えることと、後世にも伝えること、これを目的として、私は動かなくちゃなということが原点で。後世に伝えることってどういうことかって言うと冒頭に言いました先輩方が色々集めた資料を、まずこういった形にすること。形にすることによって残ること。残ったものを将来の、今の子供や孫の世代が見ることができるようになること。それによって、自分の住んでいるところがどういうところかということと、昔はこうだったんだ、こういう良いところもあったんだと。〔…〕

とりあえず今残して、石巻ってこういうとこだったんだよねっていうのを、皆さんに知ってもらおうと〔…〕。

ここでは、いま「自分の住んでいるところ」がかつて「こういうとこだった」という連続性の共有が模索されている。まちにはこのような過去があったのだという再発見を史資料は促す。伝承施設の展示や各地の震災復興誌等では、津波災害直前・津波来襲直後・復旧復興事業が進展した直近の空撮画像を並列して提示することが多い。こうした提示は想起のスクープを 3.11 前夜から（いま）までに局限してしまう。これに対して「石巻アーカイブ」のころみは連続性の厚みを数世代前と後にまで押し広げようとする。

こうした過去と現在の接続は歴史や情報の挙証ではなく、想起と物語りによって行われる。

写真展を見に来た人たちに、この場所はどこどこですか、この人は誰誰だっというのをポストイット

で貼ってもらっています。そうすると面白いです。「XXさんちの〇〇ちゃんだ！」って付箋に書いて貼っていくんです。そんな風にかかれても俺らは分からないじゃないって思うじゃないですか。でも高齢の人たちはみんなそういう風に貼っていくんです。そして喜ぶんです。そして書かれている人に連絡して、本人に確認すると、ああっこれ67年前の俺ですよ、という感じなんです。凄く面白いです。

写真展には、杖をついたお年寄りや、車椅子のお年寄りがずいぶん来ましたね。こういう写真を見ると当時の記憶が蘇ってくるんじゃないですかね。結構喋られますね。

高齢者はただ被写体の情報を提供している、という解釈では、かれらが写真を見て喜びを表し、喋り始めることを説明できない。展示会やワークショップで起きていたのは、写真に映っている「XXさんちの〇〇ちゃん」と自分が川辺や道端で遊んでいたという集合的記憶の想起である。その想起は、はるか遠ざかっていたはずの風景がふたたび自分に戻ってくるという出来事であるために喜びをもたらす。

以上のように、「石巻アーカイブ」は古写真・古地図を軸に、震災以前のまちの集合的記憶を現在と将来世代につなげようとする。北村ほか(2018)は、コミュニティアークライブ活動が地域住民の「シビックプライド」を醸成し地域レジリエンス向上に寄与することを示唆している⁴⁾。その醸成の核心には、アーカイブの編纂や展示といった公的活動を通じて、災害と時間経過により大きく姿を変えた郷土をめぐる記憶が肯定的に再確認されるという仕掛けがあると考えられる。

だが、なぜ写真や地図がそうした再確認を可能とするのだろうか。次章ではこの点を空間の再編という観点から考察してみたい。

4. 考察

(1) 門脇・南浜の空間再編

東日本大震災の被害とその後の復旧・復興過程は、被災市町村に大規模な空間再編をもたらした。最大の被災自治体の一つである石巻市も当然例外ではない。市域556平方kmのうち73平方kmが浸水し、損壊家屋数は5万6000棟を超える。発生した瓦礫は海中に没したものを含めると629万トンと推計されている。次の津波に対する防災対策を伴った復旧・復興事業は、被災空間の様相を大きく変えるものとなった。防災集団移転が5地域で実施され、市内6地区で新市街地が形成された。居住地域・産業地域の区画整理が進み、防災緑地、高盛土道路、防潮堤が建設された¹⁷⁾。また、1,696haに及ぶ区域が住居建設が禁止される災害危険区域に指定された(市街地のみの数字)¹⁸⁾。

こうした空間の再編はそこに住んでいたひとびとや、生業において関わりを持ってきたひとびとにとって、物理的な生活環境の一部が変化したり、それを失ったりすること以上の体験であったと推測される。きわめて単純化して言えば、かつての親密な場所は日々の生活を支えるだけでなく、記憶と歴史を語り、人生の経験を組織化してゆく営みをも支えていた。そしてまた、記憶と歴史をかたちづくる過程は、それに対応した場所を構築する作業でもある¹⁹⁾。津波を起点とした10年間の空間再編は、そうした記憶と

場所の関係が大きく乱れたという体験であったと考えられる。結論を先取りして言うと、「石巻アーカイブ」の活動は、かつてまちが担っていたこの記憶と場所のつながりを、写真や地図を媒体としてケアするという志向を持っているのではない。

さらに同市門脇・南浜地区に視界を絞り、空間再編のよりミクロな様相を検討してみよう。同地区は石巻市内でも特に壊滅的な被害を受けた場所のひとつである。同地区で東日本大震災により落命された方・行方不明となっている方の総数は489名であり、住民の11%にのぼる。シミュレーションでは地震発生56分後に津波が到達したとみられる。地区は日和山という絶好の避難場所を背後に持ち、小学校や保育所の子どもたちが避難に成功した。他方でいったん避難した小学校校庭から自宅に戻ってしまった住民や、自宅から移動できなかった住民が命を落としたことが示唆されている²⁰⁾。

『石巻古地図散歩』によれば、門脇・南浜地区の大半はかつて谷地(やち)と呼ばれる湿地帯だった。近世以後、海運業・水産業・工業の集積により密集した宅地が形成された。この形成過程は更新をくりかえし伴うもので、それによりまちは多層的な歴史・生活空間をつみかさねていた。牡鹿半島や日和山といった固定された遠景、寺や墓地や「濡れ仏さま」といった長期間そこに存在する固定施設、生活・移動の軸となる七間(しちけん)道路、地域の帰属意識と誇りを担う小学校、季節の変転に連動して盛衰する樹木、風向きや天候、そして更新頻度が高いが住民の生活と記憶に最も密接に結びついた家屋や店舗。こういったさまざまな層が折り重なってひとつの「まち」を成しており、この多層性によって多様な時間感覚(一日の生活、バスの運行ダイヤ、仕事や交友のテンポ、季節、漁業や海運のリズム、人生と世代)が共存していた。

親密な経験を積み重ねて熟知された空間spaceを「場所place」と呼ぶことにする²¹⁾。門脇・南浜はそこに住んでいた人々(生存者と死者)にとってかけがえのない「場所」であったが、震災後にこの多層的な空間は大きく再編された。まず地域の大部分が災害危険区域に指定され、住宅や病院などの建築が禁止された⁶⁾。指定から外れた新門脇地区は東日本大震災復興特別区域法を背景として土地区画整理事業が実施された。区画整理と一体化して復興住宅が建設され、また十数軒の民家が再建されている。地域のほぼ全ての建築物が破壊・流出したなかで、津波火災により外壁が焦げつつも校舎が残存した旧門脇小学校は空間再編の焦点の一つとなった。保存・解体をめぐる葛藤の後、校舎は両端の一部が解体されたうえで遺構として保存されることが決まった²¹⁾。災害危険区域は石巻南浜津波復興祈念公園として再整備され、県営・市営の公園施設内部に石巻市慰霊碑と「みやぎ東日本大震災津波伝承館」が建設された⁶⁾。祈念公園内部には公益社団法人3.11みらいサポートの伝承施設「南浜つなぐ館」、公園から道路を挟んで伝承交流施設「MEET門脇」が立つ。また西に歩くと日和幼稚園バスの慰霊碑がある。これら全てをT.P.+7.2mの海岸堤防と河口部河川堤防が取り囲んだ。

10年にわたるこうした空間の再編は、大災害後の「土地利用」の合理的転換と解釈することもできる。しかしこれを歴史と記憶が沈殿した親密な「場所」の消失として捉えるとき、生存者にとって再編が持つ別の意味を探り出すこともできる。すなわち、まちは時間と経験を記憶へ、記憶を歴史へと濾過し沈殿させてゆく機能を担っていた。この濾過作用は物語と呼ばれる。まちは物語である。親密な場所に織り込まれた記憶は「〈ここ〉で、わたし(たち)



写真2 石巻南浜津波復興祈念公園（撮影：定池祐季）

は……をしていた」という物語りをみちびく。カードゲームの「デュエル」をしていた〈ここ〉、放課後にパラパラを踊った〈ここ〉、というように⁷⁾。まちはそこに棲むひとびとの個別の経験と時間を沈殿させつつ、まち自身も少しずつ更新されてゆく。その空間の急激な再編は、そこに関わるひとびとの個別の物語を支える働きが失われることである。

石巻南浜津波復興公園は、敷地内に「震災前に街と人の生活があったことを示す街路網を残す」（同市計画資料）デザインを採用している（写真2）。追悼公園としての空間再編と、住民の記憶の〈ここ〉性の調停が図られていると解釈できる。

(2) 〈ここ〉からの物語

以上のように解釈するとき、個別の物語りを支えるというまちが担っていた働きを写真と地図が部分的に引き受けていると考えることができるのではないか。写真と地図は、物理的な形状や質量や持続を持たないある一瞬の記録であるけれども、きわめて限定された仕方でもちの多層性を映し取っているのである。

震災とそれ以前のまちなみや生活を想起・想像させるものとして「災害遺構」がある。その想起はその後の復興の歩みや個人個人の固有の思い出へつながってゆく。遺構がこうした働きを引き受けられることができるのは、実際にその建物の前に立つことで、建物の細部の状況のみならず、建物の周囲・内外に出入りする身体と運動の感覚、季節の感覚や潮風の匂い、周囲の地形との相互関係をひとが感じ取るためである。こうして遺構は〈ここ〉と〈あるとき〉（もしくは〈そのとき〉）を強制的に結びつける。遺構は想起と想像の起点を否定なく災害の来襲の瞬間に据え付け、その座標は被災空間の再編の焦点とならざるをえない。

遺構と比較すると、写真と地図はこうした直撃的な喚起を引き起こさず、よりゆるやかな歴史と記憶の連続性へ誘導する。進駐軍軍医 G. バトラー氏撮影の写真を例に検討してみよう（写真3）。

まず眼に入るのは両手を腰に当てポーズを取る兵士、そしてその手前に座る坊主頭の少年たちと、背景の鳥居の列である。画面奥へ続く参道と鳥居が明瞭な一点透視図法の構図を提示し、参道と右側の畦の境目あたりに撮影者が立ってカメラを構えたことがわかる。兵士の視線は撮影者もしくはカメラに固定されているが、少年たちの視線は統一されていない。中央で片膝をついている少年は明確にカメラを見ているが、それ以外の子どもたちはやや右側を見て

笑っていたり、隣の子どもの顔を覗き込んでいたりする。全体的にやわらかな雰囲気があり、撮影者と被写体の関係がそこに反映されていることを鑑賞者は即座に感得する。参道の右側には水田が、左側はおそらく空き地になっており、ファインダーが切り取った視野以上に撮影地点が広がりを持っていたことがわかる。さらに少年たちの視線からは、撮影者の右側に何かがある／いることを推測させる。撮影に遅れた友人がいたのであろうか。被写体のこうした視線や姿勢からも、写真が撮られた空間の広がりや鑑賞者の視界に浸透してくる。そして、その視線が織りなす空間は撮影者＝鑑賞者を取り囲み、そのなかに撮影者と鑑賞者は改めて自らの視線と姿勢をいつのまにか置き直している。右足で踏んでいる畦の草のやわらかさ、鳥居の塗装が剥げた部分のがさつした触感に身体が気づき、次の想像を刺激する。その想像力のなかに「石巻ってこういうとこだったんだよね」という実感が構成されてゆく。

写真は撮影者の視点と遠近法の奥行きを残す。そのため、撮影者と被写体のあいだで分かち持たれていた〈ここ〉が、写真とそれを見る者のあいだにも生じる。地図はパースペクティブをほとんど捨象するが、その代わりに〈ここ〉とそれ以外の場所との相対的な方角・距離の関係を示してくれる。こうして、地図と写真は空間と時間において隔たっているけれども、〈ここ〉を指し示すことを可能にする。そこから現れる物語は、経験と時間が沈殿した親密な場所がたしかに存在したことを証す。

こうした体験は写真の平面上に配置された個々の被写体や色点の一つずつ認知し、それらを総合して最後に写真が持つ「立体感」を得るという段階を踏むものだろうか。おそらくそうではなくて、いまわたしの〈ここ〉らへんにある諸物体や〈ここ〉から見通されているものが、一つずつ前後関係や質感を確認されてようやくわたしが立体的に身動きし始めるのではなく、初めから全体が〈ここ〉の奥行きや広さ狭さの実感に織り交ぜられて知覚されているのと同様に、写真のなかの兵士、子どもたち、鳥居や背景の雲は、それらが細やかに表情を見せ始めるすこし以前からすでに全体がそこにそのように在るものとして見てとられ、わたしを誘い込もうとする。つまりいまのわたしの〈ここ〉がつねに知的な算出や推定に一步先んじて与えられているのと同様に、写真が語りかけ、指定してくる〈ここ〉も、ある程度は記憶やノスタルジーを動員しつつも、やはり知的な整理を必要とせずと与えられている。

もちろんこの2種類の〈ここ〉が同一化することは稀



写真3 Photograph by George A. Butler, 1951.
© President and Fellows of Harvard College,
Peabody Museum of Archaeology and Ethnology,
PM 2017. 11. 1. 369.)

である。写真と自分のあいだで取り交わされる〈ここ〉は、その写真を覆う両手や、写真の縁を探りとする視線の動きといった不安定な運動のなかで一時的に架構されるものであって、いまのわたしの身体や精神がたえず引き寄せて放射させている本当の〈ここ〉ほどの根強さを持たない。しかしこの強弱の〈ここ〉のズレが物語を語り始める素地となる。

以上の記述は、現在と過去の石巻に強い結びつきを持たない著者（高原）によるものである。同地の過去のすがたを知るひとや、現在そこに生きているひとは、写真や地図が与える〈ここ〉に、自分自身の身体と記憶が体得している〈ここ〉をさらに重ね合わせることができる。こうした〈ここ〉性の重層化は、さらに複数のひとびとの〈ここ〉群の接合を通じて、震災によって大きく変容した場所と記憶の関係を再びつなぎなおしてゆくと考えられる。

(3) 記憶とアーカイブ

従来、デジタルアーカイブに関する研究は「情報」の概念を前提としてきた。たしかに資料、証言記録、写真、映像などはいずれも「情報」とみなすことが当然であり、それだからこそ広範な収集、検索、大量で精細なデータの保存・提示、メタデータの共有、GIS 等への応用が可能である。しかしアーカイブの関連物を「情報」とみなすとき、それを無制限に複写・流通可能な客体的事物として、また価値や質において差異の無いものとして扱うことになり、結果としてその関連物が元来もっていた、人間や環境とのアクチュアルな関係がいったん切断されてしまう。写真は情報である以前に、それを撮ったひと・そこに映るひと・それに触れたひとにとっては身体感覚と心情に浸透してくる存在であり、シャッターを押す指先、視界、被写体としてはにかむ表情といった実感の延長にあるものである。ところがその切断により、アーカイブに格納された情報をいかに「活用」すべきかという前提から議論を始めざるをえない。

ここで別の観方を取ってみると、アーカイブが扱っているのは〈記憶〉あるいは〈物語の素地〉であるとも言えるのではないか。「記憶」概念についてはすでに人文科学・社会科学・心理学・神経生理学において膨大な研究の蓄積があるため、さしあたり「個人や集団の文脈において想起され、構築されるもの」と規定しておく。デジタルアーカイブが収集・保存・提示するものは、価値や質において差異の無い「情報」の束ではなく、つねに地域住民や共同体にとって何らかの意味と価値を伴って現れ、さらに次の想起を促す記憶である。とりわけ地域住民と距離の近い市民デジタルアーカイブにおいては、一枚ずつの写真や地図は、何らかの大切さの実感や情感や新たな想起や物語り行為につながってゆくものであり、そのひと自身のパースペクティブのもとで常に新たに意味づけられるものである。したがって、アーカイブによって記録を閲覧する、編集に参加する、資料を提供するといった個々の行為そのものが、本人や共同体にとって正負の価値や意味を持ち、伝承・復興・防災にも直接的な影響を及ぼすと考えられる。たとえ冒頭で描いた「郷土史づくりプロジェクト」の生き活きとしたやりとりや、写真展示会における来客者の想起は、「石巻アーカイブ」が「情報」というより「記憶」の次元で参加者と交流していることを示している。

ここで「記憶」概念を重視するのは、自然災害が平常の生活における記憶や物語の感覚を大きくゆるがせ、伝承・復興・防災においても個人や共同体の想起や物語り行為のあり方がその核心問題の一つとして現れると考えられ

るためである。大災害は、その渦中にいたひとひとにとって個別的体験であると同時に、その記録・想起・表象の過程で社会やコミュニティや他者との関係において絶えず意味が共同構築されてゆく集合的記憶であり、なおかつ外傷性をはらんだ記憶である。災害の救援・復旧・復興の過程では膨大な記録が生み出され、その情報がアーカイブに格納されてゆく。他方で記憶という観点では、覚えておきたいこと・思い出してしまうこと・思い出せないこと・忘れられないこと・忘れてしまうこと・忘れたいこと・語られてしまうこと・語れないことがあまりに多く、その動態は集合性と外傷性ゆえに制御が容易ではない。災害の伝承を考慮する際、すでに確定された情報や教訓をいかに体系的・効率的に啓発・伝達するかという観点だけでなく、こうした記憶と物語の問題をも検討する必要がある。

たしかに災害デジタルアーカイブや、それに関連する企画などが「記録と記憶」をセットにして扱うことは珍しくない。だが多くの場合、両者の関係は明晰に問われていない。両者が同一視されるならば、あるいは記録資料や「情報」がそれを刺激とする想起を生み出すことをもって「記憶」の現れとみなすなら、あるいは個人的な証言が展示品の一部に組み込まれているだけなら、記憶は情報が規定する文脈のなかに閉じ込められてしまう。それは他の取り組みの補完材料になりはしても、「復興」や「防災」の、あるいは個々人やコミュニティの回復・再建の手がかりにならない。アーカイブは情報の集積所だけでなく、物語の揺籃であるべきではないか。

「石巻アーカイブ」や被災地で活動する市民デジタルアーカイブは、こうした災害をめぐる記憶と物語の問題をケアするという役割を担っていると考えることはできないだろうか。とりわけ、本章で検討してきたように写真や古地図といった媒体を介することで、単なる好古的趣味を満たすのでも、震災以前のノスタルジーに帰るのでもなく、「場所」と記憶／物語の関係をケアしていると考えられる。「ケア」はきわめて多義的であるが、客観的・標準的な「治療」とは異なる、当事者の主体性や個性に焦点を当てた支援行為や関係を探るための基礎的概念として、看護・介護・保育・終末期医療などの分野で90年代から検討が重ねられている。「石巻アーカイブ」の活動は、「被災者」の心理や健康をケアの直接の対象とするのではなく、震災以前の写真や地図を媒体とすることで、空間再編によって損なわれる場所と記憶の関係の再接続を促し、物語りの起点となる〈ここ〉の実感の回復を支えるものであると考えられる。

こうした「ケア」の働きは、地域ワークショップや写真展など古写真や古地図と接触する場面でもっとも顕著に生じる。たとえば大国（2018）は、阪神・淡路大震災の発災1年後に兵庫県西宮市で旧家の私蔵古地図の展示会が開かれた事例を紹介している。そこでは地域住民達が過去の地理を思い出して言葉を交わし「同窓会をしているような気分」になり、地震で「本当に駄目かという目に」遭ったが「自分が忘れていたこの地域のこと、ふるさとのことを思い出させてもらって、本当によかった」という感想があったと言う¹⁴⁾。この点では、住民が史資料に接触すること自体が「ケア」の要点であって、デジタルアーカイブであることは二義的であるようにも思える。だが写真や地図から生じる〈ここ〉性の実感、それらの史資料がそれ自体の物語性によって裏付けられていなければ支えを失う。つまり、この地図が過去の災害を生き延びてここにあることや、この写真がアメリカの民家のガレージに放置されていたフィルム缶から数奇な経緯によって石巻に戻

ってきたものであるという、それ自体の物語を持って提示されていること、そしてデジタルアーカイブというかたちで次の災害を生き延びてゆくという期待が、厚みのある〈ここ〉となって場所と物語のあいだをとりむすぶのである。

5. 結語

本稿は、市民デジタルアーカイブ活動が被災地において果たしうる役割を検討してきた。写真展やワークショップで地域の高齢者が撮影場所や被写体の思い出を語りだすことは、単に過去を「思い出す」というだけでなく、〈ここ〉性が写真との間で回復されていたことを示唆している。市民デジタルアーカイブとしての「石巻アーカイブ」の役割の本質の一つは、古写真や古地図の〈ここ〉性を記憶と結びつけ、震災を含んだ「まち」とひとびとの歴史と物語りを可能にするところにある。

補注

- (1) 柴山ほか (2018) は、「震災アーカイブ」を「震災関連資料の収集から整理、保存、利活用などの行為を総称しての言葉」、「震災デジタルアーカイブ」を「震災関連資料の書誌情報等がデータベース化され、コンピュータ上で検索や閲覧などできるもの」と規定する²³⁾。以下、本稿の記述もこの定義に従う。
- (2) 国立国会図書館東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」内ページ「検索対象データベース等一覧」(2021年3月31日時点)(<https://kn.ndl.go.jp/static/db?language=ja> 2021年8月10日最終閲覧)。なお同ページで「閉鎖」「承継」とあるものも数に含めている。
- (3) 「石巻アーカイブ」ウェブサイト内「石巻アーカイブとは」(<https://ishinomaki-archives.com/activity/> 2021年4月18日最終閲覧)。
- (4) 北村ほか (2018) は、以下3点のいずれかに該当するものをコミュニティアーカイブとして定義している。「特定のグループや地方の歴史を記録した文書、写真、口頭でのストーリーなどの資料を収集、保存、作成することによって、より包括的で多様な地方資源の保存に貴重な貢献をするもの」「コミュニティのアーカイブと関連プロジェクトは、活動に参加する人、コレクター、ボランティア、ユーザー、訪問者の生活を豊かにする記録であること」「コミュニティのアーカイブは、学習と有用なスキルの獲得を支援し、異なる年齢や背景の人々を集めて社会参加を促し、コミュニティのアイデンティティを向上させ、異文化間の相互理解を促進するもの」。本稿で主題としている「石巻アーカイブ」はこの定義にもおおむね該当すると考えられる。なお、本文の論述が煩雑になることを恐れて、この「コミュニティアーカイブ」概念と中村 (2018) の「市民デジタルアーカイブ活動」概念の包含関係等は本稿は整理しない。
- (5) 石巻市：東日本大震災に伴う石巻市災害危険区域の指定及び建築制限に関する条例 (平成23年12月26日条例第41号)。
- (6) 復興庁・宮城県・石巻市「石巻市南浜地区復興祈念公園 (仮称) 基本計画」H27年8月。
- (7) 「MEET 門脇」の展示物より。

謝辞

本研究の調査過程では石巻市門脇地区在住の本間英一氏に、同

地区の郷土史を教えてくださいました。また、同市在住の高須賀正忠氏には本稿の一部について閲読・ご教示いただきました。心よりお礼を申し上げます。本研究は令和2-3年度・東北大学災害科学国際研究所リソースを活用した共同研究助成による成果の一部です。

参考文献

- 1) 中村雅子, 2018, まちを語る主体を編み上げる: 市民デジタルアーカイブ活動の生成、維持、変容の検討, 社会情報学, 6(2), 31-47.
- 2) 今村文彦, 佐藤翔輔, 柴山明寛, 2014, 東日本大震災記録のアーカイブの現状と課題, 情報の科学と技術, 64(9), 338-342.
- 3) 柴山明寛, 2020, 災害記録を活かすためには, 情報の科学と技術, 70(9), 458-463.
- 4) 北村美和子, 村尾修, 柴山明寛, 2018, 東日本大震災後のコミュニティアーカイブの活動: 仙台市荒浜地区を一例とした報告, デジタルアーカイブ学会誌, 2(2), 12-15.
- 5) 内山琴絵, 2021, 効果的な災害伝承とは: 災害デジタルアーカイブの可能性, 日本地理学会発表要旨集, 174.
- 6) 小保田春加, 2020, 震災デジタルアーカイブを活用した防災教育カリキュラム開発 —2014年神城断層地震を事例に—, 日本地理学会発表要旨集, 298.
- 7) 奥堀亜紀子, 2020, 土地の記憶とともにある石巻研究 序論的考察, 東北宗教学, 16, 189-214.
- 8) Nana Okura Gagné, 2020, 6.1 The cosmology of fieldwork: Relationship building, theoretical engagement and knowledge production in Japan Anthropology in: Kottmann, Nora and Reiher, Conny: *Studying Japan Handbook of Research Designs, Fieldwork and Methods*, Baden-Baden: Nomos, 169-172.
- 9) Hanno Jentzsch, 2020, 6.3 Building arguments on national policies from everyday observations in: Kottmann, Nora and Reiher, Conny: *Studying Japan Handbook of Research Designs, Fieldwork and Methods*, Baden-Baden: Nomos, 177-183.
- 10) Julia Gerster, Akiko Okubori, Yuki Sadaike, Kohei Takahara, 2021, Between debris and memorial: The meaning of disaster-affected objects for local residents in the recovery process of the Great East Japan Earthquake, *Japan Anthropology Workshop Newsletter*.
- 11) 高原耕平, ゲルスタ・ユリア, 定池祐季, 奥堀亜紀子, 小野寺豊, 2021, 記憶と歴史のあいだ 震災前をつなぐ「石巻アーカイブ」の模索, 地域安全学会第48回春季研究発表大会.
- 12) ウヴェ・フリック (小田博志監訳), 2011, 新版 質的研究入門 (人間の科学) のための方法論, 春秋社.
- 13) Fulco, Flavia; O' Day, Robin; and Slater, H. David, 2019, Voices from Tohoku - from a digital archive of oral narratives to scientific application in disaster risk reduction[東北からの声・口承記録デジタルアーカイブから防災・減災のためのアプリケーションへ]. 今村文彦, 鈴木親彦編, デジタルアーカイブ・ベーシックス2 災害記録を未来に活かす, 勉誠出版.
- 14) 大国正美, 2013, 在野のアーキビスト論と民間所在史料をめぐって, 名古屋大学文学文書資料室紀要, 21, 165-184.
- 15) 全国美術館会議, 2016, いま、被災地から —岩手・宮城・福島美術と震災復興—.
- 16) 石垣宏, 邊見清二監修, 2006, いしのまきふるさと地図帳, NPO法人いしのまき環境ネット.
- 17) 石巻市, 2017, 東日本大震災 石巻市のあゆみ.
- 18) 松本英里, 姥浦道生, 2015, 東日本大震災後の災害危険区域の指定に関する研究, 都市計画論文集, 50(3), 1273-1280.
- 19) 相澤亮太郎, 2005, 阪神淡路大震災被災地における地藏祭祀

- 場所の構築と記憶—, 人文地理, 57(4), 62-75.
- 20) 後藤洋三, 2015, 石巻市門脇・南浜地区の事業所と住民の津波避難行動, 土木学会論文集 A1, 71(4), 930-942.
- 21) イーフォー・トゥアン (山本浩訳), 1993, 空間の経験, ちくま学芸文庫.
- 22) 佐藤翔輔, 今村文彦, 2018, 石巻市における震災伝承・震災遺構に関する3つの検討会議の事例分析 会議手法に対する有効性の検証と配慮すべき点, 自然災害科学, 37(505), 47-72.
- 23) 柴山明寛, 北村美和子, ボレー・セバスチャン, 今村文彦, 2018, 東日本大震災の事例から見えてくる震災アーカイブの現状と課題, デジタルアーカイブ学会誌, 2(3), 282-286.

(原稿受付 2021.8.28)
(登載決定 2022.1.8)